

会 議 録

第 3 回定例会

開会 令和 5 年 5 月 1 1 日

教育委員会会議録

1 開 会 令和5年5月11日 午前10時

2 閉 会 令和5年5月11日 午前11時25分

3 教育委員会出席者

教育長	榊 浩一
委 員	島 隆寛
委 員	三木 千佳子
委 員	河野 暁
委 員	岡本 弘子
委 員	横田 賢二

4 教育長及び委員以外の出席者

副 教 育 長	臼杵 一浩
教 育 次 長	中野 敏章
教 育 次 長	生田 雅和
教 育 創 生 課 主 幹	湯藤 浩樹
学 校 教 育 課 長	酒井 吉彦
生 涯 学 習 課 長	倉橋 文代
教 育 政 策 課 長	小原 広行
教 育 政 策 課 副 課 長	山星 茂

[開 会]

教育長 定例会を開会する旨を告げる。

[会議録の承認]

教育長 配付されている会議録を承認して差し支えないかを各委員に諮る。

各委員 異議なし。

教育長 会議録を承認する旨を告げる。

[議 事]

教育長 報告事項3を非公開として差し支えないかを各委員に諮る。

各委員 異議なし。

教育長 そのように取り計らうこととし、議事に入ることを告げる。

《報告事項1 令和5年度徳島県公立高等学校入学学力検査集計結果について》

教育長 報告を求める。

教育創生課主幹 内容等を報告する。

〈質 疑〉

三木委員：今回の入試の平均点や得点分布は、問題作成時に想定していたとおりであったか、あるいは想定外であったか。

教育創生課主幹：問題の難易度については、例年と大きく差がつかないように配慮しつつ、作問している。5教科全体の平均点が上がった要因として、次の3点が考えられる。1つ目は、受検者が取り組みやすい題材を用いて、工夫して作問したことにより、無回答の問題の割合が低下した点。2つ目は、数学、理科、社会について、検査時間を従前の45分から5分間増やして50分で実施をした一方、問題数は前年度と同じ、あるいは減らしたことにより、受検者が粘り強く思考をすることができる時間の確保につながった点。3つ目は、各学校が学力向上に向けて日頃から授業改善に取り組んでいる点。以上の要因が積み重なった結果、5教科全体の平均点が上がり、得点分布のグラフも、高い得点の方向に移動したと思われる。

三木委員：例年、資料にある授業改善の視点を踏まえた取り組みの成果が、次の年ほどのくらい生かされているのかを見据えて問題作りをしているのか。

教育創生課主幹：入試結果や本県独自の学力ステップアップテストの結果、あるいは全国学力・学習状況調査の結果を分析・検証して学校に還元し、授業改善のためのPDCAサイクルを回すことで、学力向上を図っている。

島委員：教科によって平均点に差があるときに、有利不利がないように得点調整を行っているか。

教育創生課主幹：本県の入試制度では、大学入学共通テストような科目間の得点調整のようなことはしていない。

島委員：その年の入試問題の難易度によって、自分の得意教科の得点と全体の平均点との関係で、結果的に不利になるということが起こるのか。

教育創生課主幹：作問する段階で、難易度が年によって大きく変わることを無いうように配慮をしている。

島委員：得点調整が無いことは、事前に周知されているか。

教育創生課主幹：各学校に周知している。

《報告事項 4 徳島県社会教育委員会議の提言について》

教育長 報告を求める。

生涯学習課長 内容等を報告する。

〈質 疑〉

横田委員：提案の柱である、「人づくり・つながりづくり・地域づくり」には「社会教育士」制度の果たす役割の大きさを実感した。制度の理解促進に向けた具体策はあるか。

生涯学習課長：令和2年度より、社会教育主事講習受講者や大学の養成課程を終了した者を対象に「社会教育士」の「称号」が与えられる。文科省でも「社会教育士」の量的拡充を図っており、企業・NPO等、幅広い人材が受講できるようになったことから、まちづくり・防災・福祉などの分野で多様な主体の活躍が期待される。当課においては、これまで「社会教育士」制度の周知に力を注いできたが、次期四国地区社会教育主事講習を見据え、新たに商工団体等への、制度のPRを計画している。

島委員：若い世代に、地元の文化行事等に参加して地域の伝統を継承してもらいたい。若い世代のアイデアを地域の活性化につなげ、地元愛の醸成を図ったり、彼らが親世代になったときのつながりの循環に結びつけられたりすると、地域の特性は守られるのではないかと思う。しかし、相談窓口について、どこに話を通し、どのように連携すればよいか、情報が少ない。

生涯学習課長：提言の「つながりづくり」の3として学校管理職を対象とした社会教育の研修について言及している。学校では「総合的な探究の時間」等を活用し、地域との連携が進められている。地域からのご提案については学校管理職や学校運営協議会等を通じてお申し出いただければよいのではないか。しかし、地域連携について不安や悩みを抱える教職員も少なからずいることから、より良い形で地域との連携・協働を進められるよう、研修等を実施する必要性を感じている。

中野次長：高等学校では「スクール・ミッション」「スクール・ポリシー」を作成し、「学校の特色化・魅力化」に注力しており、地域と連携した取組についても、各学校が「総合的な探究の時間」の中で多様な形で実施している。地域からのご提案については、各学校長に連絡いただくか、学校運営協議会の委員の方であれば議題としてご提案いただければ有り難い。

岡本委員：学校と地域の連携は校種を問わず多様な形で行われている。地域の中には様々な知見を持った高齢者がいる。地域の方々がその魅力の掘り起こしをしっかりと行い、文化や産業など、継承すべきものを学校に提案していくようなシステムがあることが望ましい。地域の方々は学校支援に非常に協力的で、学びたいとも思っている。地域の人材が学び合えるような場づくりが必要ではないか。

生涯学習課長：住民の方が、地域の課題を自ら発見していく姿勢の醸成は社会教育の役割である。住民の気づきを学びにつなげ、学び手同士のつながりを生かし、地域の伝統文化の継承、課題の解決に結び付けていくといった循環が創出できるよう働きかけて参りたい。

教育長：岡本委員の御意見は、地域学校協働本部が当てはまるのではないか。

生涯学習課長：地域学校協働本部の取組は、地域の力をお借りし、地域全体で子どもの育ちを支援する活動。コーディネーターやボランティアの方々に登録していただいている。協働本部等も活用しながら、地域の魅力を子どもたちに伝えることができるように進めて参りたい。

教育長：県内の全ての学校にはコミュニティ・スクールを設置して、地域の方の力をお借りしながら学校運営を進める体制を整えている。一方で、地域学校協働本部を始め、地域課題を地域の方と共に解決に導いていく仕組みも順次整備

している。これらが有機的に連携することで、地域も学校もWin- Winの関係性になることをめざしており、徳島県内の好事例などを教育委員の皆様にも御見学いただく機会を設けている。

三木委員：地域発案の企画は学校に提案してもよいのか。

生涯学習課長：直接学校に提案するケースも想定される場所であるが、学校運営協議会という協議の場があるので、その委員になっている方々につなぎ、ご提案いただく方法等もある。

三木委員：学校運営協議会の委員との連絡方法、例えば、だれがどこにいて、どのように相談を持ちかければよいかわからない点が多い。この部分を明確にしてほしい。これまでも、学校との連携について、相談・連絡方法等が分からず実現に至らなかったケースもあったという地域の声を聞いたので、窓口のわかりやすさが必要であると思う。

生涯学習課長：学校と地域とのより良い連携体制構築にあたって「窓口のわかりやすさ」というのは重要なポイントであると思う。地域人材の持つ知識やスキルを学校教育の場で生かしていただけるよう、周知啓発に力を注ぐとともに、「連携窓口のわかりやすさ」についても、研修項目等の中に組み込んで参りたい。現段階では、各学校の管理職等に御相談いただければと思う。

島委員：学校のホームページ等に学校運営協議会の委員の名簿を掲載し、地域住民への情報共有を行うとともに、各委員には地域と学校をつなぐ役割を担ってもらえるような環境整備が必要ではないか。学校運営協議会の委員の連絡先が公開されていれば、学校と地域との連携のハードルは低くなるのではないか。

生涯学習課長：地域連携の必要性や重要性については、学校側も承知しているところだが、子供たちのより良い学びや育ちに、地域住民の力をどのように生かすかという点について、試行錯誤している部分もあるかと思う。この点について関係課と連携を図りつつ進めて参りたい。

教育長：学校との連携について、地域からは敷居が高いと認識されているのか。

岡本委員：地域人材の受け入れについて、温度差があるのは否めない。学校の多忙化等の理由により、連携体制が続かなかった事例も聞いているので残念に思う。地域連携の重要性・目的や将来のビジョン・育てたい人材像が明確であれば意識も変わっていくと思う。学力保障を始め、従前の教育活動が忙しく、ゆとりを持たない学校現場の実情もある。

河野委員：学校も就業体験等で地域の方々の支援を受けている。全てを実現できるわけではないが、地域からの提案は、まずは学校管理職に相談していただければPTAや他の職員等とも協議しながら受入れ体制を整えていくと思う。

教育長：学校側は敷居を高くしているわけではないが、地域住民の方々からすると高く感じるのかもしれない。

三木委員：地域から学校に提案したい気持ちはあっても躊躇してしまう。こちらが勝手にハードルを高くしているケースもあると思うが。教育委員として学校の現状、教職員の多忙さを知れば知るほど、地域からの提案が教員を疲弊させるのではという思いを持つようにもなった。管理職の方々と協議をするにも価値観や認識の共有が必要で、時間もかかる。多忙な中、学校現場を困らせているのではとってしまう。

教育長：学校の業務体制や、教職員の業務の1日の流れ等について、地域の方々が、具体的に想像・理解するのは難しいのかもしれない。しかし、学校の内側を理解し、調整してくださる「学校の応援団」が地域に増えれば、相談もしやすくなったり、学校も機能的に動けたりと、地域連携が円滑に進むのではないか。まずは、学校運営協議会の委員の方々から「応援団」になっていただくような取組も必要だと考える。連携の好事例などを収集して参りたい。

岡本委員：「応援団」がいかにかかりしているかによって、地域連携の成果は変わってくると思う。学校長に直に相談すると、対応するのが教職員という図式になり、学校現場が疲弊する一因となってしまうので、学校運営協議会を活性化させて、学校と地域が「育てたい子ども像」を共有して取り組めるシステムをめざすべきだと思う。コミュニティ・スクールが始まった頃、京都の好事例を視察した。地域住民が熟議を重ね、学校カリキュラムを理解したうえで外側から応援しようという環境ができていた。このような応援団が地域に生まれると、学校を中心に地域の様々な産業・文化を継承していけるのではないかと思った。

教育長：教育委員会事務局職員には、「行動する・発信する・持続可能なものを創る」ということを念頭において業務を行うよう指示しているが、学校も地域に向けて「行動する・発信する・持続可能なものを創る」という仕組み作りについて考えていく必要がある。地域の「応援団」が上手く機能している好事例を紹介できるよう、情報収集をしていきたい。

生涯学習課長：10年ほど前から「学校サポーターズクラブ」という取組を行っている。地域の方々が、スクールガードや学校の環境整備、部活動の支援等を通じて学校を応援するものである。このような取組の発展の方向性も探って参りたい。

教育長 報告を求める。
学校教育課長 内容等を報告する。

〈質 疑〉

岡本委員：4月18日に学力調査をすることは妥当なのか。学校長をしている方から、今年度新しく赴任した学校で学校質問紙を回答する際、自校の状況がわかりにくいため、前年度の校長が回答すべきだと感じたという連絡をいただいた。4月18日実施では、前年度の組織で行われたことを、今年度の組織が回答するということになり、そのずれを踏まえると、この時期に実施することには疑問を感じる。

学校教育課長：実施時期については、文科省で決定されており、全国的に実施しているため、変更することは難しい。新しく着任した方は、新年度から新たに取り組んでいる学習活動もあると思うので、そういった内容を盛り込んだり、前任と連絡を取り合ったりして、回答していただければと考える。

[非公開]

《報告事項3 令和6年度使用高等学校用教科用図書の採択について》

《議案第6号 人事異動（事務局等課長級以上の行政職員の異動）について》（追加）

[閉 会]

教育長 本日の議事が全て終了したので閉会する旨を告げる。

閉 会 午前11時25分